

第六章

藝術の勞作者

遠く彼方に燭として輝くものあり、
之を手に捕へ能はずば、
再び試みよ、成功貰ふべきにあらず、
捕へんと努力することが貴きなり。

卓越せよ、御身は其結果を見ん。

アール・エム・ミルネア

シコーベルト

勞苦勤勉は何事に卓越するにも唯一の道なるが、藝術に卓越するにも、亦然りとす。何事も偶然の出來事に依りて成就するものにあらずと雖も、美くしき繪を描き、氣高き彫像を刻むが如きは殊に然りとす。藝術の士が熟練を以て刷毛や鑿を用ふるは、天才に由ると雖も、是れ實に不屈なる勤勉の賜なり。

サー・ジ

サー・ジョシユア・レーノルツは、勤勉の力を信ずること甚だ深く『藝術の發

ヨ・シ・ユ
ア・ル・ツ・レ
ノ・ル・ツ・レ
術・に・於・て
勤・勉・を
力・を・論・ず

卓・越・せ・る
藝・術・家
貧・窮・を
つ・り・出

達は天才、趣味、天資に依りて顯はさると雖も、又勉めて得らるゝものなり」との意見を抱けり。バレーに書を贈りて曰く、『繪畫にもせよ、又他の如何なる藝術にもせよ、之に熟達せんと志すものは、起さるより臥するまで、只其一事にのみ心を注がざるべからず』と。又言ひしことあり、『一事に上達せんと志すものは、朝も晝も夜も、好む時も好まぬ時も、其事に従はざるべからず、彼等は、それが道樂にあらずして辛き勤勞なることを知るべし』と。勤勉専心の藝術最高の熟達をなすに必要なことと毫も疑を容れずと雖も、生れながらの天才にあらずしては、如何に勤勉勞苦するとも、藝術家となること能はざるも亦事實なり。才能は生來のものなり、只之が修養に依て完全に進むのみ、而して此修養なるものは、學校の知識教育よりは遙に効力多きものなり。

最も偉大なる藝術家にして、幾多人生の貧苦障礙に抗して敢然として其道を進まざるべからざる者ありき。讀者は直ちに其顯著なる實例を思ひ浮ぶるならん。麵包焼人なりしクロード・ロレーン、潜水者なりしティントレット！二人のカラヴァッオ一人は顔料を搗き碎く人、一人はグチカンの漆喰運送

人、草賊の仲間なりしサルヴトル・ロサ、農家の小者たりしギョトリ、ギブシー（譯者註、一派の無頼民なり）たりしチンガロー、父より放逐せられて物乞たりしカーベド・テ、石切工たりしカノヴ等、其他多數の有名なる藝術家は、甚だしき逆境の下に烈しく勤勉勞作して高名を得るに至れり。

英國の俊秀なる藝術家も亦藝術的天才の養成に適したる境遇に居たるものにあらず。ゲインズボローとベークンは織物屋の子なり。バアリーは愛爾蘭土の少年水夫なりき。マクリスはコークの麵包屋の小僧なりき。オビーとロムニーはイニゴ・ジョンスの如く大工の子なりき。エストはペンシルベニア州のクエーカー信徒、譯者註、基督教徒の一派なる一小農の子、ノースコートは時計師、ジャックソンは仕立屋、ニッファイは印刷屋、レーノルズ、キルソン、キルキーは僧侶の子、ローレンスは飲食店の主人の子、ターナーは理髮師の子なりき。我國の畫工の中五六人は、元來多少は藝術に關係を有し居りしことは事實なり。例へばフラクスマンが漆喰模型を賣る父を有せしが如き、バードが茶盆の飾をなす業を營み居りしが如き、マーチンが馬車のペン

藝術の金銭の慾に動かされずるにあらむ

キ塗手なりしが如き、ライト、ギルビンが船のペンキ塗手なりしが如き、チャントレーが彫刻師、鍍金師なりしが如き、デボット・コックス、スタンフィールド、ロバーツが風景畫師なりしが如き、是れなり。

是等の人の世に秀でたるもの、天幸によるにあらず、偶然の事によるにあらず、實に勤勉忍耐心苦勞作に由るなり。中には富を得たる者ありと雖も、富を目的として勞作せし者はなし。げに、金錢の慾のみを目的として藝術家が早年にして克己専心の努力を續け得る者にあらず。目的を追求して心に快樂を得、是れ最良の報酬なり、金錢の如き偶々以て之に副ひ來りしのみ、高潔なる多くの藝術家は、其作品の賣價を人と爭ふことをせずして、其天才の向ふまゝに勤勉せり。スバグノレットはクセノフォン(譯者註、希臘の有名な哲學者)の小説の美なる理想を其生涯に實現せり。其富を得しや潔く之を棄て、好んで清貧勤勞の生涯に歸れり。某畫工利を得んがため大に苦心して一畫を描けり、人あり此畫についてミケル・アンジェロ(譯者註、以太利有名な美術家十六世紀の人)の意見を求めたるに、アンジェロ答へて曰く『余は思

ミケル・アンジェロ、富を論ず

ミケル・アンジェロ、及チ忍耐勤勞

ふ、彼にして斯くばかりも熱心に蓄財を欲する中は憐むべき人たるべし』と、ミケル・アンジェロも、サー・ジョシユア・レーノルズの如く勤勞の力を確く信ずるの人、其所信に曰く、手にして固く心の儘に従ふやうなり居らば、人の考案したる物にして、大理石に彫刻せられざるものは一もなしと、彼自身は最も不屈不撓なる勞作者なりき。其精力盛んにして勤勉時間の多きこと時人及ぶものなかりしが、彼は之を以て其質素なる生活の賜とせり。日々勞作に従事して時々少量の麵包と葡萄酒とを取るの外、他に要せず、屢々夜中に起き上りて勤勞せり。かゝる時には其用ふる板紙製帽子の上に蠟燭を置き、其光に依りて彫刻するを常とせり。時々は疲れはて、着物を脱ぐ能はず、其儘眠れり、是れ眠りて身心休まらば直に復た起きて勤勞するに便なり。彼好んで小車に乗れる一老人の像を刻す、其持てる砂時計の上に *Ancora impatio* と記しあり『尙ほ余は學びつゝあり』との意なり。

チ、アンも亦不撓の勞作者なり。其有名なる『ビートロ・マーティレ』の畫は之に八年間かゝれり、又其『基督最後の晚餐式』は七年間を要せり、其チャーレン

ス第五世に贈りたる手紙に曰く『余は此最後の晚餐式の畫を七年の間殆ど毎日之に従事して後、今陛下に贈るなり』と。藝術家の大作に忍耐勤勞耐久修養を要することを思ふもの、稀なり、是等大作は容易に出來しが如く、速に完成せられしが如く見ゆ、然れども此、容易の域に達するに如何ばかりの困難辛苦を要せしぞや、エネスの貴人は彫刻家に謂ひぬ『御身が僅に十日間の勤勞にて作りし半身像に五十セキン(伊太利の金貨)を求むるは高からずや』と。されど藝術家は答へぬ『御身は余が十日にして此半身像をなすに、三十年間の學習を要せしことを忘れ居るなり』と。約束の畫を完成するに甚だ手間取るとて、一日ドメニチノを責めたる者あり、ドメニチノ答ふらく『余は絶えずそれを心の中に描き居れり』と。故サ！オーガスタス・カルコットの勤勉の衆に優ることの大なるや、其名畫『ロチエスター』をなすに四十個程の描畫を試みたる程なり、此不斷の反復は藝術に成功する重要條件の一にして、又實に人生其者に於て成功する主なる條件なり。

エストが
早年の成

天は人に天才を與ふるに吝ならずと雖も、藝術の學習は誠に長久不斷の

功却つて
不利益と
なる

勤勞なり、英俊の藝術家は世に多かりき、然れども勤勉の之に伴ふなくんば、此英才と雖も何等爲す所なし、エストの逸話は人能く知れり、彼僅かに七歳の時其長姉の兒の搖籃を看守りしが、其眠れる顔の美しさに撲たれて、直に走りて紙を求め、黒インクと赤インクとにて之を描けり、此小事件は彼が美藝術家の天才なることを表はし、其天性の傾向は枉げんとするも枉げ能はざることを示せり、彼早き成功に安んぜずして益々勉めたらんには、更に大なる美術家となりしならん、惜しい哉、彼の名聲は學習、辛苦、困難を以て得たるものならざりしかば、大なりしかども永く續かざりき。

リチャード・
ド・キルソ
ンとツカ
レリ

リチャード・キルソン、尙ほ見たりし時、燃えさしの木片にて其家の壁に人間や動物の形を描くことに耽りたり、彼は最初は肖像畫に注意を向けぬ、然るに伊太利に在る時、一日友人ツカレリを訪ひしに、不在にて歸宅を待ち居る中、退屈せしかば、友の部屋の窓より見ゆる風景を描きたり、ツカレリ、歸り來りてキルソンの畫の巧なるに驚き、曾て風景畫を學びしか如何と問へり、キルソン答ふるに然らざる旨を以てす、友は曰ひぬ『さらば余は御身に

サー・ジョシユ・ア・レーノルヅは、小兒の時、其課業を顧みずして、只描畫を好み、爲に常に父に叱られたり。彼は醫家たることに定まり居りしが、其藝術への強き傾向は、抑ふるべくもあらずして、彼は畫家となれり。ゲーンスボローは學童たりし時、サッドバリーの森にて畫を描くを常とし、十二歳にして確かに美術家となれり。彼は鋭敏なる觀察者、勤勉なる勞作者なりき、——一度見たる風景にして、畫題たるに適するものは、必ず其勤勉なる手にて之を描けり。莫大（カ）、小商の子キリアム・ブレイクは、父の店の書出の裏に圖案を引き、又帳臺の上に畫を描けり。エドワード・バードは小兒の時漸く三四歳なるに、椅子を踏臺として壁に畫を描きて曰く、是れ佛蘭西及び伊太利の軍人なりと。父はバードに繪具箱を求めやり、又其藝術を愛好する心あるを思ひて、藝術家になさんと欲し、之を茶盆の製造人に徒弟としたり。彼は是より漸次身を立て、勤學勞苦に依り、遂に美術學院會員の位置に達せり。

ホーカルス
は其課業を怠りたれども、字母（譯者註、アルファベット）を假に字母と譯す、日本の伊呂波に當るをい、ろくに書きて樂しみとせり。學校にて日課として紙に記すものは種々の飾を之に書き加へたれども、其内容は寧ろ正しからざりき。此事のため彼は腕白兒童に批難せられたれども、其かゝることに巧なるは優に儕輩を抜けり。父はホーカルスを銀細工人の徒弟となし、此處にて彼は繪畫を學び、又匙や肉叉に頂飾字飾等を彫ることを學びたり。銀細工より猶進んで銅に彫ることを學ばんとせり、殊に怪獸怪物の紋章を彫ることを學ばんとせり、之を練習せる間に種々の人間の容貌を描かんと欲するに至れり。彼が此術に特に卓越して遠く他の及ばざるものあるは常に注意深く觀察學習せし結果なり。彼は善き顔の目鼻立ちを細かに記憶し來りて之を描く才能を有し、此才を勉めて研きたり。又若し特に奇妙なる姿や不平の顔を見たる時は即座に之を拇指の爪に描き、家に歸りて後餘暇を以て之を擴大して描けり、幻想的又は創始的なる事物は常に強く彼の心を牽けり。彼は珍らしき容貌を看んために道なき所にさまよひ入る

を常とせり。かくして専心蘊蓄する所ありしかば、後其作物の中に博大なる思想と豊富なる觀察の結果とを充たすを得たり。爲にホーガルスの繪畫は其時代の性格、風習、思想を忠實に寫す所のものとなれり。彼の説に曰く、眞正の描畫は只一の學校に於てのみ學ぶを得べし。此學校は、自然の保つ所のものなりと。誠に彼は其専門とする所の外には高き修養ある人にあらざりき。其學校教育を受けたるは極めて僅少のみ、綴字法も學校にては充分に學ばざりしなり。其餘は彼凡て自修にてなせり。多年の間彼は逆境にありしが、常に快活の心を以て勤勞せり。貧なりしと雖も、其小收入の範圍にて生活するやうにし、誇りて曰く、余は、几帳面なる會計方なりと、正當なる自負と謂ふべし。其凡ての艱難に打ち克ちて名聲赫々として一代に揚がるや、過ぎし勤勞辛苦を語るを好み、彼を名譽ある人と爲し、英名ある藝術家となせし其人生の奮闘を再び繰返したしなど云へり。或る時曰く『余は記憶す、一志、一志をも持たざる程にて市中に入りたる時、此處にて皿を造りて十ギニアの金を得るや否直に歸宅し劍を着け、恰も衣裳ボサドに數千金を持てる人の如くに安んじて外

バンクス
とマル
ティ
ン

出せり』と。

『勤勉と堅忍』是れ彫刻家バンクスの標語にして、彼は自ら之を實行し、又強く人に薦めたり。彼深切なることを以て有名なりしかば、多數有爲の青年門を叩いて教を乞ひ助を求めたり。傳へて曰く、一日一人の少年矢張此目的にてバンクスに會はんとて其戸を叩きたり。バンクスの婢、其戸の叩き方の荒らなかるを怒りて少年を責め、將に逐ひ出さんとせり。バンクス下婢の聲を聞きて出て行き看るに、一人の少年手に二三の繪畫を持ちて戸口に佇み居たり。彫刻家は尋ねぬ『御身余に何の用あるか』と。少年答ふ『先生もし出來得べくば學院にて繪畫を學ぶことを許されんことを乞ふ』と。バンクス答ふるに自ら之を計り能はざるを以てし、少年の畫を示さんことを乞ひたり。此畫を仔細に看たる後、バンクスは曰ひぬ『我少年よ、學校に入るには尙早し、家に歸れよ、――學事に心を注げよ、――アポロ譯者註、希臘人の神と信ぜしものを猶善く描かんと勉めよ、――かくして一ヶ月の後再び來りてそを余に示し給へ』と。少年は家に歸り、――倍舊の勤勉にて描き勉め、――一月の後再びバンクスを訪

づれたり。畫は前より勝り居たり。されどパンクスは猶勉め學ぶべしとて懇切に忠告して家に歸らしめたり。一週の後少年は再び來りぬ。畫は大に巧になれり。パンクス告げて曰く『心安んずる所あれ、自ら愛惜せば世に大名を爲し得べし』と。此少年は即ちマルレデー(譯者註、十九世紀英國の畫工)なり。而してパンクスの豫言は充分に中りたりき。

クロード・ロレーンの名聲は、半ば其不撓なる勤勉の賜なり。ロレーンのチヤムペーンに生る、貧窮なる農夫の子なり、最初糊細工師の徒弟となる。其兄彫木師なりしが、後彼を其店に置きて此業を學ばしむ。此處にて其技藝に巧妙なることを表はせしが、旅商人某クロードを伊太利に伴ひたき由を申込みたり。兄は之に同意し、青年なるクロードは伊太利の首府羅馬に赴きしが、幾許もなくして風景畫家アゴスケノ・タソシ家僕としてクロードを傭ひたり。此家の僕をなし居る中、クロードは初めて風景畫を學び、時經るに従ひ作品を出し始めたり。次に彼は伊太利、佛蘭西、獨逸等に漫遊し、時々途中に滞在して風景を描き、以て其財布の空乏を補へり。かくて羅馬に歸るや、彼の畫を

求むるもの大に増し、其名聲は全歐洲に及ぶに至りぬ。彼は撓まず倦まず諸方面より「自然」を研究しぬ。時の大分は之を建物、土地、樹木、木の葉、等を描寫するに用ひ、精細に仕上げて之を貯へ、以て其自然研究の資に供せり。彼は又大空に大に注意し、朝より夕まで終日之を眺め、雲の過ぐるにより光の増減によりて起る種々の變化に注意せり。此不斷の經驗觀測に依りて彼は手と眼との熟練を得たり。其之を得しや甚だ徐々たりしと云はるれども、而して此熟練は終に彼を第一等の風景畫家となしたりき。

「英國のクロード」と稱せらるゝターナーも、亦クロードの如き勤勉勞苦の生涯を送れり。父は倫敦の理髮師にして、ターナーも理髮師になることに定まり居たり。一日父の理髮し居たる客、少年なるターナーが銀の盃に描きし紋章の畫を見て感じ、父に勸むるに、其子をして天性の傾向に従はしむべきことを以てす。かくしてターナーは遂に美術を職とすることを許されたり。青年美術家の常として、ターナーも幾多の艱難に遭遇せり。是等の艱難や皆大にして彼の境遇や甚だ惡しかりき。されども彼は常に好んで勞作し、如何

なる小事にても喜んで之に骨折れり。彼は晚餐を供せられ、且一夜半クラウンを得る約にて喜んで人に備はれ、他人の畫に印度インクにて天色を塗りたり。かくして彼は金を獲、又熟達を得ぬ。次に彼は案内記、曆、及び低廉なる口繪を要する書物を造ることに従事したり。後彼は曰ひき『他に何事か爲し得べきものありしや、そは最上等の仕事なりき』と。彼は何事をなすにも注意と良心とを以てし、報酬少なき故を以て其描畫を粗雑にしたることなかりき。彼は勉學と生活とを目的としぬ。常に出来るだけ力め、一畫を描くに其前の畫より進歩せずして罷めしことなし。かくの如くに勤勞する人の大を成すや勿論なり、其力の進歩と思想の了得力とは、ラスキン(譯者註、十九世紀英國有名の文士)の語を以て言へば『日出の時、光の漸次増すことの如く確かなりき。然りと雖も、ターナーの天才は一の讃辭を経ずして明かなり。彼が國民に遺したる多數の繪畫こそ彼の最上なる記念碑にして、彼の名を長へに記念するものなれ。』

ペリア
とジャッ

美術の中心地羅馬に往かんことは、常に美術を學べる學生の最大希望な

ケエスカ
ローマ
行。其

り。然れども此處に至るには費用を要すること大なるに、學生は多くは貧乏なり。さりながら困難を打ち破らんと、の確固たる決心あらば、遂には羅馬に達し得べし。されは佛國古代の畫工フランコイス・ペリアーは、羅馬を訪はんと、の火の如き熱望を抱き、盲目なる無學者の案内者として其處に到らんとを諾せり。長き放浪の後、辛うじてグチカン(譯者註、羅馬の一部、グチカン丘陵の上に立つ建物を總稱す、羅馬法王の宮廷も此中にあり)に達し、勉學して名聲を揚げたり。ジャツケエスカローも羅馬を訪はんと、の熱望熾なりしこと之に譲らず。父は彼の美術家なることに反對せしが、少しも之にひるまず、伊太利に赴かんと志して家を脱出せり。旅費なくして出發せることゝて、忽にして大困難に遭遇し、ギブシー(譯者註、前に出づ、草賊の一種)の一隊に落ちて之に加はり、之と共に市場より市場へと彷徨ひて幾多の冒險危難に會せり。此著しき流遇の間、カローが狀貌形象等に就いて蒐集したる知識は、誠に非常なるものにして、後彼の之を其稱讃驚歎に値する繪畫彫刻の中に再現せり。

カロート遂にフロレンスに達せしや、一紳士あり、其穎敏熱情を喜びて之を一畫工の許に置き、て學ばしめたり。されども、彼は羅馬を離れて滯留するを好まずして、間もなく去りて羅馬に赴けり。此處にて彼はボリジ及びトーマシンと相知りしが、二人はカロートの壁筆畫を看て、彼が藝術家として光輝ある生涯を送るべき由を豫言せり。然るにカロート家の一知人、偶然にも彼に會し、彼をして歸宅せしめんと努めたり。此時彼は既に放浪の生涯を好む情強くなり居りて、家に歸りても安住する能はず、再び家を出奔せり。然れどもチュリンにて兄に攫まり再び家に戻されたり。終に父は子に逆らふの無効なるを見て、いや／＼ながらもカロートが羅馬にて研學することに同意せり。是に於て彼は羅馬に往き、此度は良師に隨ひて繪畫彫刻を學びつゝ、數年間留まりぬ。羅馬より佛蘭西への歸路、コスモー第二世の獎勵によりてフロレンスに留まり、猶數年間此處にて習學し勞作しぬ。コスモー第二世死せしかば、ナンシーなる其家に歸り、彫刻刀と針とを用ひて暫時にして富財と名聲とを獲たり。内亂にてナンシーの圍まれたる時、リチュウ彼に囑

するに之が畫と彫刻とを以てす。されども、彼は其故郷の被りたる災害を記念するを好まずして、明白に之を謝絶しぬ。リチュウ其志を枉ぐる能はず、依つてカロートを獄に投ぜり。獄内にて彼は其羅馬初旅の時、缺乏を救はれしギブシーの舊友二三に逢ひたり。ルイ十三世カロートの入牢を聞きて直に之を宥せしのみならず、何事にてとも望むものを與へんと言へり。カロートは直に舊友ギブシーの徒を放免し之を窘迫することなくして巴里にて乞食することを許されたとしと請ひたり。此奇妙なる請願は、カロートがギブシーの徒の像を彫むべしとの條件にて聽き届けらる。故に彼は其彫刻の奇書を「乞食」と題したり。ルイ王は若し彼にして巴里を去らざれば三千ルーブルの年金を與ふべしと言ひしと云ふ。然れどもカロートは今ほボヘミア人の性質を有すること、大自由を愛重すること盛にして、年金を受けず、ナンシーに歸りて其處に死するまで働けり。彼の勤勉の大なりしこと、其遺せし繪畫及び金屬版圖案の數千六百個にも上るを以て知るべし。彼は殊に奇異の畫題を好み之を取扱ふに甚だ熟練せり。彫刻刀を以て彫りし其金屬版彫刻

鍛冶屋に
家なるベ
ン・エ・セ
リニ上達
の志盛なり

は繊細美妙を極めたり。

ベン・エ・スト・セリニの生涯は、更に一層小説的冒險的なり。彼は巧妙なる黄金細工師、畫工、彫刻家、彫金師、技師及び著述家なりき。彼自らの語る自傳は、自叙傳として空前のものなり。彼の父ギョヴン・セリニはフロレンスのロンゾ・デ・メデイシの宮廷音樂家にして、其子ベン・エ・ストに關する最高の欲望は、其笛吹きの名手となりんことなりき。然れどもギョヴンニ其職を失ひしかば、其子を出して何かの職業を學ばしむるの必要を感じ、ベン・エ・ストは鍛冶屋の徒弟となれり。彼は少年にして早く既に繪畫技術を好み、其業に従ひては忽ちにして熟練なる工人となれり。市民と争闘のことに關係して六ヶ月間放逐せられたり、此間彼はシーナに鍛冶屋を營みて寶玉細工、黄金細工に一層の經驗を得たり。

父は尙彼の笛吹手とならんことを主張し、彼は之を嫌ひたれども、吹笛を續け居たり。藝術は彼の主たる快樂にて、彼は熱心之を追ひ求めたり。フロレンスに歸りて彼は細心留意レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケル・アンジェロの作物

を學び、又黄金細工に尙更に上達せんと欲して、徒歩にて羅馬に到りしが、此處にて幾多の危險に會せり。最も熟達せる貴金細工師なりとの名聲を擔うてフロレンスに歸りしが、彼に細工を求むる人甚だ多し。彼平生短氣にして爲に常に危險に陥り、屢々命を失はざらんがため逃亡する必要に迫りき。かくして彼は托鉢僧に扮してフロレンスに逃れ、再びシーナに隠れ、後羅馬に隠れたり。

第二回の羅馬滞在の間に、セリニは愛顧の客甚だ多く、鍛冶屋と音樂家と二重の勤めをなす筈にて、羅馬法王に用ひられたり。彼は常に大家の作品を看て、上達を計り、勉學を力めたり。彼は寶玉を嵌め、渤藥を施し、印を彫り、金銀青銅の細工をなして、其巧妙藝術家中の第一なりき。何かに有名なる鍛冶屋あることを聞く時は、彼は直に之に勝らんと志せり。斯の如くにして彼は金屬細工にて甲と競争し、渤藥について乙と競争し、寶玉について丙と争へり、彼の業に屬せるものにして、彼が之に上達せんと欲せざりしものなし。

彼既に斯の如き精神を以て勞作す、其大を成し得しや疑ふべきにあらず。

彼は不撓の活動力を有し、絶えず動き居たり。或る時はフロレンスにあり、或る時は羅馬にあり、又次にはマンツァにあり、羅馬にあり、ネーブルスにあり、次に復たフロレンスに歸りたり、而して又ヴェニスに住み、巴里に住む、其長さ旅行は凡て常に乗馬にてせり。セリニは多量の荷物を携ふること能はざりし故、其赴きし所にては先づ自用の器具を造りたり。其器具の考案をなすに止まらず、自ら鋸打ち、鑿り、鑄造し、形を造りて之を製作せり。實に彼の作品は彼の天才を證明す、人の能く考案し作成し得る所にあらず。誠につまらなき物品——婦人の帶の釦子、印、小錠、衿針、指輪、扣鈕等——も、彼の手に依りて美術の美くしき作品となれり。

セリニは著しく手細工に巧妙熟練なりき。鍛冶屋ラファエロ・デル・モローの店に一日一外科醫來りモローの娘に手術を施さんとせり。セリニ偶々此處にありしが、外科醫の器具甚だ拙劣粗雑なるを見て、當時一般に皆然りき。十五分間待たんことを醫師に乞ひたり。彼は直に我家に馳せ戻りて、一片の最良なる鋼鐵を取り、之を美くしき小刀に造り上げ、携へて鍛冶屋に歸り、爲

セリニ、
ペルシウ
スの立像
を作る

に醫師の手術は首尾よく出来たり。

セリニの造りし立像の中最も重なるはフランシス第一世の囑托にて、巴里に於て造りしジュービター(譯者註、希臘人の神と信ぜしもの)の銀像及びフロレンスのコスモー公爵の依頼にて造りしペルシウスの像なり。彼は尙アボロ、ヒアシンタス、ナーシスサス、及びネプチューンの像を大理石にて造れり。ペルシウスの鑄造に關して著しき一出来事あり、彼の特質を明々白々に表はせり。

コスモー公は蠟製の模型を彼に示して確言して曰く、是れ到底銅像に造る能はずと、不能の一言は、セリニの心を激せしめ、彼をして試み爲さんと決心を起さしめたり。彼は最初粘土にて模型を造り、之を焼き、之に蠟を塗りて完全なる立像の形となしたり。次に其蠟を蔽ふに一種の土を以てし、此土を焼きたるに、蠟熔解して模型を支ふる二本の壓條の間を流れ出でたり。混雑を避けんため、此土を焼くことは竈の直下に穿ちたる穴の中にて行ひ、熔解したる蠟は之より管及び口を通りて、之に具へたる模型の中に入るやうに

なしたり。

セリニは今始まる鑄造の進捗に備へんがため、數束の松の薪を求めて竈の中に置けり。竈には眞鍮と青銅との小片充てり。火は今薪につけられたり。樹脂多き松の薪は、忽ち怖ろしく燃え上りて、火は店に燃えつき、屋根の一部は焼けたり。時に風吹き雨降りて、竈の火消え、金屬の熔解を妨げたり。幾時間もセリニは薪を加へて火を保たんと努めたりしが、終に疲れ果て、心地悪しくなり、立像の鑄造終らぬ中に自ら死せんかと氣遣ひたり。彼は已むなく熔解したる時に金屬を注入することを助手に任せ、自らは床に臥したり。人々病中のセリニを慰め居る中に、一人の助手突如入り來り悲み告げて曰く『悲しいかな、御身の事失敗に歸して復た恢復すべくもあらず』と。之を聽くや否、セリニは忽ち臥床を飛び出して仕事場に走りぬ、到りて見るに火消え、金屬は再び堅くなり居たり。

直に一隣人に人を馳せて一ケ年餘も乾かせし若き榲の一束を乞ひ受けぬ。火は再び燃え上り、金屬は熔解し輝き始めたり。さりながら風は依然とし

て激しく吹き、雨は條々として尙注ぎぬ。依て我身を保護せんため二三の食卓に掛毛氈の切、古衣を持ち來りて其陰に隠れて竈の中に薪を加へたり。一塊の白蠟を、他の金屬の上に加へ、或は鐵を以て、或は長桿を以て動かす中に、全部忽ち熔解したり。成敗今や幾許もなくして決せんとす。時に落雷の如き一大叫音起り、閃々たる大光目前に輝きぬ。竈の蓋は破裂し、金屬は熔けて流れ始めたり。然るに其流れ方遅緩なるを見て、彼は臺所に走り入り、其處にある銅や白蠟の器物——粥碗約二百皿、種々の鍋釜——を持ち行きて竈中に投じたり。遂に金屬は自由に流出するに至り、かくして美なるペルシウスの立像は鑄られぬ。

セリニが臺所に入りて、竈に入れんため其器什を取り去りたるは寔に天才の心に燃ゆる神聖なる狂熱と謂ふべし。これにつけて讀者はパーレセー(譯者註、第三章に出づ)が、其土器を焼かんため家具を剝ぎ取りしことを想記すべし。されど二人は其熱心と云ふ一事を等しくするのみ、其性格の相異なること二人の如く甚しきはなし。セリニは是れ一個無宿浮浪の徒、自らも萬

人の嫌惡に値すと云へり。されども其工人としての非常なる熟練、其藝術家としての天才に關しては、誰人も異議を唱ふるものなし。

ニコラス・パウシンの生涯は、セリニのそれに比すれば甚だ整齊せり。彼は藝術の理想に於て、日々の生活に於て、心高く想清く、知性の力、品格の正大、高潔なる率直に於て等しく人に優れたり。彼はルーエンに近きアンデレーヌに生る、貧家の子なり。父は此處にて一村校を有せり。かくの如きを以て、彼は父の教育を受くる便宜を有せしが、傳ふる所に據れば、やゝ學事に疎にして書物や石版に畫を描くことを好みたり。田舎の一畫工、彼の畫を見て大に喜び、兩親に求むるに其子の趨向を妨ぐるなからんことを以てせり。此畫工はパウシンに課業を教ふることを承諾し、彼は忽ち大に進歩して、畫工は最早教ふべきことなきに至れり。パウシン之に安んぜずして尙學習せん、と欲し、十八歳の時巴里に向つて出發したり、途中看板を描きて其身を支へたり。

彼巴里に着きぬ、藝術の新世界は彼の前に開かれ、彼を驚かし、彼をして競争の念を生ぜしめぬ。暫時の後羅馬を訪はんと志し其旅に出て立ちたり。さ

れど只フロレンスまで達し得るのみにして再び巴里に歸りたり。再び羅馬に赴かんと企てしが、此度は前よりも不成功にてリヨンに達せしのみ。然りと雖も、彼は機會の來るものあらば、之を利用して細心留意自家修養の具となし、學習勞作に精勵せしこと毫も前日と異なるなし。

斯の如くにして十二年は經過しぬ、是れ實に無名と辛勞との年なり。き、失敗と失望との年なりき、而して恐らくは貧苦の年なりしならん。終にパウシンは首尾よく羅馬に達するを得たり。此處にて彼は勤勉精勵古の大家に學び、殊に古代立像の完全にいたく感じて之を學びたり。暫くの間彼はデウケスノイと云ふ彫刻家と共に住めり。デウケスノイ亦彼と等しく赤貧の人、パウシンは之を助けて古代の作品を模造せり。彼はデウケスノイと共に羅馬の最も有名なる立像——特に「アンチナウス」——を能く調べたり。人の想像する所に據れば、此研究は彼が將來の作品に非常なる影響を與へたりと云ふ。同時に彼は解剖學を學び、人物畫を多く描き、逢ひし人々の態度容姿を描きて山の如く貯へ、暇あれば友人より借りし藝術の良書を繙けり。

凡て此間彼は只自家の修養に満足して依然として赤貧の生活を營めり。彼は其畫を求むるものに賣りて價の多寡を問はず、一豫言者の畫をハル・ゲルにて賣り、ブレーグ、オプ・ゼ・フイリス・タイン・スの畫は六十クラウンにて賣れり。——此畫は後カー・デナル・デ・リ・チェリウ・一千金を以て求めたるものなり。此困難に加ふるにパウシンは兇惡なる熱病にかゝり、爲に大に窮乏に惱みしが、シエヴリア・デル・ボッソー金を與へて之を助けたり。此紳士に彼は後「沙漠の休息」と題する一畫を描き與へしが、美しき畫にして病中恵まれし金圓に報ひ得て遂に餘りあり。

勇敢なるパウシンは、艱難の中に勉學辛勞を續けたり。尙高き上達を望みて彼はフロレンス及びヴェニスに赴き、其研學の範圍を擴めたり。彼が良心に従へる勤勞の結果は、其時描き始めし數個の大畫として表はれたり。——即ち第一に「ジャー・マニックスの死出で、續いて、臨終塗油式」「ユー・ダミダスの契約」「マンナ」「セー・バイン人の誘拐」出でたり。

さりながらパウシン名聲の揚がること徐々たりき。彼は其性隱退を好み

て交際を避けたり。人は彼は畫工よりは寧ろ思想家なりと謂へり。繪畫に従事せざる時は繪畫の意匠を靜に考へつゝ郊外に只獨り長き散歩をなせり。羅馬にて友とする數人の中にクロード・ローレン（譯者註、前述の美術家）あり、彼此者とラ・トリ・ナイト・ド・ウ・モントの高臺にて數時間續けて藝術及び好古に就いて語れり。羅馬の單調と閑靜とは彼の趣味に適せり。其描畫にて清貧の生活を送り得るを以て、彼は決して此處を去らんと思はざりき。

然れども彼の名聲は今や羅馬の外に聞え、巴里よりは繰返し／＼歸還せんことを求め來れり。國王の主任畫家たるべき任命は來りぬ。最初は彼躊躇したり、伊太利の諺を引きてかく言ひぬ「余は既に羅馬に十五年を送り、此處にて妻を娶りたり、且此處にて死して葬られんことを期し居れり」と。王の任命は再び來り、彼も遂に諾して巴里に歸りたり。然れども其巴里に入るや、同職のもの甚だ之を嫉妬し、彼はまた羅馬に戻らんと欲せり。其大作の中二三は巴里にて出來たり。——即ち「セント・サザニー」「洗禮」「最後の晚餐」なり。彼は絶えず働き居たり。最初は彼、人の求むる所は皆畫きたり、或は宮中の書物の口繪

を畫き、特に聖書バイブル及びグーグル詩集の口繪を畫き、烟窓の紋形をものし、或は掛毛氈の意匠をなせり。されども後遂に之を不可とし、エム・デ・ヤンテルに謂ひぬ『書物の口繪、生母マリア、セント・ルイスの會議の畫、繪畫展覽所への種々の畫及び宮中用掛毛氈の意匠等を同時に描かんことは不可能なり、余は只二本の手と弱き腦とを有するのみ、余を助くる人なく、他人來りて余の勤勞を軽くすることなし』と。

彼の成功を嫉む敵人生じ、彼は之と和する能はずして之に悩み、巴里に二年間勤勞せし後羅馬に歸らんことを決しぬ。再びモント・ピンシオ(譯者註、羅馬の一部ならんなる其粗末なる住居に在りて餘生を美術の製作に精勵し、質素にして平民的なる生活を送れり。病苦に悩むこと大なりしも、常に上達を欲して學習に依りて自らを慰めたり。彼は曰ひぬ『齡長ずるに従ひ、余は益々進歩發達して最高の域に至らんと希望心に燃ゆるを覺ゆ』と。かくして努めつゝ悶きつゝ、苦みつゝ、彼は其晩年を送りたり。彼一子なく、妻は彼に先ちて死し、友も皆彼に先んじぬ。されば老年に及びては、知人の墓標多き間に

アラ
シエ
エッ
エル、
功、其
難と成

獨り子然として羅馬に留まりしが、千六百六十五年遂に此處にて死したり。其一生の貯蓄約一千クラウンをアンデレエスの親戚に遺し、人類への遺物として其天才に依れる大作を遺せり。

アラ・シエ・エッ・フェルの生涯は、輓近高尚なる心を藝術に委ねしもの、好例なり。ドル・ドレヒトに一獨逸美術家の子として生る。彼は早く既に天性繪畫に傾向を有することを現はし、兩親も亦之を獎勵せり。父は彼の少時に死し、母は家産小なりしも、家を巴里に移さんと決心しぬ。是れ其子に啓發の機會多からしめんとてなり。少年なるシエ・エッ・フェルは、畫家ゲーリンの家に置かれぬ。されども母は財産甚だ少なくして、其子を只學事にのみ委ねしむる能はず、彼女の有する所の二三の寶石を賣りて質素の生活を送り、以て他の子供をも教育を受けしめたり。かゝる事情なるを以て、シエ・エッ・フェルも自ら母を輔けんと欲し、時に齡十八歳なりしが、簡單なる小畫を描きて之を賣りて相應の金を得たり。彼は又肖像畫を描き、經驗を積み、正しき金を得たり。かくして彼は漸次描畫、彩色、製作の道に進歩するに至りぬ。其大作「洗禮」は彼の

生涯に新紀元を開く起點なりき。是より益々上達して畫家としての名聲其頂に達するに至り、「ファウスト」、「フランシスカ・デ・リミニ」、「慰藉者としての基督」、「神聖なる婦人」、「セント・モニカとセント・オーガスチン」等の名畫續々として出てたり。

グロート氏譯者註、十九世紀の人、有名なる英の歴史家なり曰く「シエツフェルが其フランシスカの製作に費せし勤勞、思考、注意の大なることは、世の常にあらず、誠に、彼は美術の學理的教養不完全にして、自らの工夫にて藝術の險路を歩まざるを得ざりき。されば其手が働き居る間に、其心は沈思に耽り居たり。彼は種々の描き方を試み、彩色法の試験をなし、描き直しては復た描き直し、而して倦むと雖も決して其勤勉を罷めざりき。彼専門の學理的知識に缺乏せしも、天は此缺陷を償ひ得るものを彼に與へたり。其高貴なる品性と深奥なる情操とは、彼を助けて一管の畫筆を以て能く人を感化せしめたり。」と。(グロート氏「アライ・シエツフェルの生涯の記念錄」六十七頁にあり。)

シエツフェル
フラックス
スマン、
其天才と
堅忍

シエツフェルが最も賞揚したる藝術家の中に、フラックスマンなる人あり。シエツフェル嘗て曰く「余、フランシスカ」の考案に於て知らず識らず人より得る所ありとせば、そはフラックスマンの畫を見たるより來りしものならん」と。ジョン・フラックスマンは、コペンハーゲンニーストラーの新街に住する貧しき漆喰模型商の子なり。小兒の時身體甚だ弱く、店の帳臺の後に枕に倚りて身を支へ、畫を描き字を書きて慰みとせり。マッシュュー氏は仁慈なる牧師なりしが、一日店に來りて少年なるフラックスマンが一書を讀まんとせるを見て、其書名を尋ね、其「コルネリウス・ネボス」と云ふ書なるを知りぬ。是れ父が數片を以て書店にて購ひたるなり。マッシュュー氏は少年と語り、其書少年の讀むに適せざれば他に一書を持ち來るべしと告げたり。翌日マッシュュー氏はホーマーの詩及びドンキョーホーテの翻譯を持ちて訪ひ、フラックスマンは是より此二書を耽讀したり。少年はホーマーの詩を讀みて勇武の氣象を鼓吹せられ、心之に充ち、自分も亦是等神怪なる英雄を詩に歌はんと欲望を抱くに至りぬ。

青年が努力の常として、彼が最初の畫は粗雜なりき。然るに父は我子の畫に誇りて一日之を彫刻家ルービリアックに示せしに、ルービリアックは輕蔑の叫を發して顔を背けたり。然れども少年なるフラックスマンは、資質正しく、勤勉忍耐にして絶えず讀書と描畫とに従事せり。次に彼は其少年の力量を用ひて石膏蠟及び粘土にて塑像を造れり。是等は青年時代の作品にして、今猶保存せられ居るものあり。是れ其價值あるが爲めにあらずして、忍耐深き天才の最初の健全なる努力として珍らしければなり。彼が歩み得るに至りし迄には猶長年月を要したりき。最初は撞木杖にすがりて怪しき歩行をなし、後漸く杖なくして歩むに至れり。

深切なるマッシュュー氏は、彼を家に招きたり。氏の妻は彼にホーマー及びミルトン(譯者註、共に大詩人なり)を解説したり。夫妻は又彼の自修を輔け、希臘語及び拉丁語に就いて教ふる所ありき。此二國語は彼家にて學びたるなり。堅忍耐久に依りて彼の描畫は大に上達し、一婦人の依頼を受けてホーマー詩中に畫題を取り、黒壁にて自ら考案して六個の畫を描きたり。彼が最初

の「依頼」！美術家の生涯に於て如何にいみじき出來事ぞ。醫師が初めての報酬、法律家が初めての依頼者、立法家が初めての演説、音樂者が初舞臺、著述家が初めての著書等、皆名聲を渴望するの士には趣味深しと雖も、美術家が最初の「依頼」は特に然りとす。少年は直に依頼を充たさんと取り掛かりぬ。かくて彼は充分に賞讃せられ、充分に報酬を受けたり。

フラックスマン十五歳にして美術學院に入る。其退隱的な性質なるにも拘はらず、其名忽ちにして學生の間に聞え、人皆有望の少年となして大成を彼に期待しぬ。誠に人々の望や空しからず、十五歳にして銀牌を受け、翌年は金牌を得る候補生となりぬ。學生皆期すらく、フラックスマン必ず金牌を得んと。蓋し其才能に於て、勤勉に於て、彼に勝るものはなかりければなり。さりながら彼は之に失敗し、賞牌は後年名なかりし一少年に與へられき。此失敗は誠に彼を益しぬ。由來敗北は決意の人を長く沮喪せしむる能はず、只正に其眞の力を喚起するものなり。彼は父に告げぬ「時來らば學院も亦其價值を認むる作品を造らん」と、彼は倍奮の努力をなし、敢て苦痛を厭はず、絶えず

考案し、模寫し、其進歩は徐々たりとするも確實なりき。

然るに其間父の家貧しく、漆喰模型業は利益少くして、弱年のフラックスマンは決然己に克ち、勉強時間を割きて父が日々齷齪せる仕事を助けたり。彼は「ホーマー」を抛ちて漆灰の饅頭を取りぬ。彼は喜んで父の職業を助けて特に卑賤の仕事に任じぬ。是れ家の生計立ちて貧苦を脱せんがためなり。かくの如き面白からぬ仕事にフラックスマンは長く勤めたり。されどこは彼に利益を與へぬ。是に依りて彼は正確なる仕事に馴れ、忍耐の精神を養ひたり。此訓練は辛かりしならん、されどそは健全なりき。

幸なる哉、若きフラックスマンの畫案に巧みなることはジョシア・エッヂウッド(譯者註、第三章に出づ、英の陶工なり)の知る所となり。彼はフラックスマンに其漆器及び土器を改良する考案の助を求めたり。斯の如きはフラックスマンの如き天才が働く仕事として低きが如く見ゆるならん。されど是れ實は然らず。藝術の士、普通の茶器や水瓶を考案するも、是れ眞に其職に勤勞し居ると謂ふべきなり。人々が用ふる日日の器具、食事の時目前に横はる物

の如きも、吾人を教養するの便りとなり、又高き修養の助となる。かくして有爲の藝術家は、苦心の作を出して數千金を得るよりも尙勝れる實際的利益を其國人に與ふるなり。苦心の大作や、只富人の繪畫展覽會に置かれて公衆の眼より隠るゝに過ぎず。エッヂウッドの頃までは、漆器や磁器の畫は、描き方も仕上げも甚だ拙劣なりしかば、彼は之を改良せんと決せり。フラックスマンは、出来るだけの力を盡してエッヂウッドの目的を果さしめんと勉めぬ。彼は絶えず種々の土器の標本畫案を造りたり。其畫題は重もに古の詩や歴史より取りしものなり。其中には今日も尙存するもの多く、且後年彼が大理石にて造りしものに、美しさも質朴さも等しきものあり。有名なるエトラスカンの瓶(譯者註、第三章に出づ)の標本は、博物館や珍物貯藏所等にありて、彼に取りては此上なき形の手本となり。彼は之に更に更に美しき考案を加へて飾れり。其頃出版せられしスチュアート『雅典』は、理想的の希臘器什の標本を彼に與へ、彼は其中最上等のものを選みて、之を光彩あり美色ある新形とせり。フラックスマンは自己が一大事業をなし居ることを知れり、——即ち其

働く所、實に社會公衆の教育を進むるに等しきことを知れり。後年彼は青年の時此事業に従ひたるを誇りつゝ語れり。誠に此事業に依りて、彼は自己の美術思想を高むると共に、社會公衆の間に藝術の趣味を普及し、自己の財囊の缺を補ふと共に、友にして恩人なるエッヂワッドの財産を増したるなり。

遂に千七百八十二年齡二十七にして父の家を去り、ソホーのワード街に畫室の附屬せる小屋を借り、且アイン・デンマンと云ふ女を娶れり。アイン・デンマンは快活、純潔、高尚なる婦人なり。妻も亦夫と等しく詩歌藝術を好み、且夫の天才を熱心賞揚し居りしかば、フラックスマンは結婚せば必ず前よりも盛なる精神を以て勞作し得べしと信ぜり。然るに獨身なるサー・ジョシュア・レーノルズ(譯者註、前に出づ、畫家なり)フラックスマンが結婚の少しく後之に會ひて語るらく『フラックスマンよ、御身結婚せしと聞く、若し眞に然らば、御身は藝術家として失敗すべし』と。フラックスマン直に家に歸り、妻の傍に坐して其手を取りて曰く『アインよ、余は藝術家として失敗せり』と。妻問ふ『如何にして然るか、そは如何にして起りしか、誰がそをなせしか。』彼答ふ『そは教

會にて起りぬ、そをなせしものはアイン・デンマンなり』と。かくて夫は妻にデ・ヨシユアの言を語れり。デ・ヨシユアの説は人の能く知る所、又屢々言説したる所、曰く若し藝術の學生にして卓越せんと欲せば、起床より就眠に至るまで、心の全力を常に藝術のことに用ひざるべからず。曰く羅馬及びフロレンスにてラファエル、ミケロ・アンジュロ等の大作を學ぶにあらずんば、誰人も大美術家となること能はずと。かくてフラックスマンは其短小なる體軀をありたけに引き延ばして曰く『さらば余は 余は大美術家とならん』と。妻も之に應じて曰く『我御身を助けて必ず大藝術家となさん、また羅馬を訪ふことが御身を美術家となすに必要ならば訪ひ給へ』と。フラックスマン問ふ『されど如何にして。』男ましき妻は答へぬ『働け、而して節儉せよ、余は決してアイン・デンマンがジョン・フラックスマンの藝術の才を敗りたりと言はせざるべし』と。かくて二人は充分の金を貯へし上は羅馬に旅行せんと定めたり。フラックスマンは曰ひたり『余は羅馬に往かん、而して會長譯者註、デ・ヨシユア・レイノルズを指す、彼は美術學院の會長なりしならん』に結婚が人に害を

なさずして益をなす事を示さん、アロンよ、御身をも亦同伴せん」と。

忍びつゝ喜びつゝ仲善き夫婦は、ワーダー街の陋屋に五ヶ年を過したり、其間二人の目的は常に羅馬への長旅行なりき。彼等は、一瞬時も之を忘れしことなし、半銭の金をも無益に費さずして旅費のために貯へたり。二人は其希望について一語をも言はず、美術學院へは少しも補助を願はず、只己等の勤勞と愛とに依りて其目的を遂げ得べしと信ぜり。此間フラックスマンの作る所甚だ少し、彼は創作の試験に供する大理石を購ふこと能はず、只屢々記念碑建造の依頼を受け、以て生計を營めり。彼は當時尙エツヂウツドのために働き居たりしが、エツヂウツドは敏速なる會計者にして、大體より言ふときは、フラックスマンは繁盛し幸福にして多望なりき。彼郷土の尊敬を受け、名譽職に推薦せらる、即ち納税人等彼を選みて聖アーン教會區の税を集むる役に推し、彼は其卸穴ホッケーにインク壺をさげて金を集め廻はれり。

遂にフラックスマン夫妻は、充分の貯蓄をなして羅馬を指して出立せり。羅馬に達するや、彼は精勵して勉學し、其身を支ふるためには他の貧しき畫

家と等しく、古畫を模寫したり。英國の旅客は彼の畫室を訪問して依頼する所あり、彼がホーマー、エスキラス、ダンデ譯者註、皆有名なる詩人なり等の詩を説明する美しき畫を描きしは此時なりき。されど報酬少なく只各十五志シリングのみなりき。然れどもフラックスマンは金の爲めのみならず美術のために畫きたるにて、其畫の美は彼に他の朋友及び顧客を齎らしたり。彼仁惠深きトーマス・ホープ（譯者註、十八九世紀英の著述家にして美術保護者のため「キュービッド」と「オーロラ」を描き、プリストル伯爵のため「アサマスの憤怒」を描きたり。彼の趣向は熱心研學に依りて向上進歩し、彼は英國に歸る準備をなせり。されども彼が以太利を去る前、フロレンスとカララの美術學院は、彼の價値を認めて會員に推薦したり。

彼名聲赫々として倫敦に至る、人の畫を依頼するもの甚だ多し。フラックスマン羅馬に在る時、マンスフィールド卿の記念像建設を囑せられしが、有名なる此像は、其歸國後幾許も經ずしてエースト・ミンスター寺院の北トランセプトに建立せらる。誠に此像は平靜、率直、嚴格なるフラックスマン自身の

記念として宏壯嚴肅に立てり、怪むなきなり、彫刻家バンクス(譯者註、前に出づ)名聲隆々たりし時、此像を見て、「此短軀の人(譯者註、像を指すにあらず、像を造りしフラックスマンを指す)が吾々總てを造りしなり」と叫びしことや。

美術學院の會員フラックスマンの歸國を聞き、殊に彼がマンズフィールドの立像を見て之を賞め、熱心に其會員たらんことを求めたり、彼は會員候補者の中に其名を列することを諾せしが、直に會員に選ばれたり、暫時の後、彼は全く一變せる人格として世に現はれたり、コーゼント・ガーデンの新街(ニースト、リット)なる漆灰模型商の帳臺の後に其勉學を始めたる兒童は、今や高き知力の人となり、藝術に卓越せることを認められて美術學院の彫刻の教授として學生を教へんとす、此優れたる地位に適すること彼の如きはなし、蓋し自己の努力に依り、艱難辛苦と戦ひて打ち勝ちたる人ほど、他を教ふるに適するはあらざるなり。

平和幸福の中に長き年を送りし後、フラックスマンは我が漸く老いゆくを知れり、愛する妻アインの此世を去りしは、彼に大打撃を與へたり、其後彼

は數年を生きしが其間に其有名なる「アキレスの楯」及び崇高なる「アーチエ
ンジェル・ミケル」惡魔を退くる圖を作りたり、——此二者は思ふに彼が最大傑
作ならん。

フランシス・チャントレー
其勤勉と精力

チャントレーは、フラックスマンより強健の人、稍々粗暴なりしも其行動に情深く、早年時代受けし艱難を打ち破りしことを誇りしが、殊に其獨立自尊に就いて誇れり、彼はシェツフィールドに近きノートンに生る、貧しき人の子なり、父は彼の尙小兒なる時死し、母は依つて再嫁せり、若きチャントレーは驢馬の背に牛乳の罐を積みて近きシェツフィールドの町に至り、母の顧客に乳を配達するを常とせり、斯の如きは誠に彼が勤勞のみすばらしき序幕なり、彼がかゝる地位より起りて藝術家最高の域に達せしもの、偏に自己の力に依りてなり、其繼父になつかずして彼は奉公に出され、初はシェツフィールドの雜貨商店に勤めたり、彼は此仕事を嫌ふこと甚しかりしが、一日彫工の窓側を通りて、中にある燦爛たる品物に氣をとられ、彫工たらんと

の志望心に動きて堪へず、此目的を抱きて雜貨商の家を去らんことを願へ

り。朋友等は之に同意し、彼は七年間の期限を約して、彫工兼鍍金師の家に徒弟となる。彼の新主人は、單に彫木家たるのみならず、印花布、石膏細工品等の商人にして、チャントレーは大に勤勉精勵して兩者を學び始めたり。其餘暇は描畫、模造、自修に用ひられ、屢々夜中まで勤勞せり。

廿一歳となりて奉公の年期未だ終らざるに、彼は證文を消さんため、其貯へし金を總て主人に渡したり。其額五十磅なり。是れ今より藝術家の生涯を踏まんとてなり。彼は次に倫敦に直行し、其著しき正直の心を以て彫工の助手の口を求め、餘暇には繪畫模造を學ばんとせり。旅彫工として傭はれたる第一の仕事は、詩人ロージャ―氏の食堂を飾ることなりき。――後ロージャ―氏と彼とは親交を結ぶに至り、彼は此室に客として來りて款待せられ、喜んで他の客に向つて此室にある自己の舊き手工を示すを常とせり。

職業を營さん爲めシエツフィールドに歸り、白墨、水顔料及び油にて肖像を描く由を廣告せり。又物師の爲めに描きし最初の白墨の肖像畫は、一ギニアの報酬を得、又油繪肖像畫の報酬として、一糖菓製造人より五磅の金と一

足の長靴を得たり。チャントレーは美術學院にて學ばんため再び倫敦に至り、復たシエツフィールドに歸りて石膏細工の半身像及び肖像畫の求に應ずる旨を廣告せり。又彼は選ばれて近頃死せる牧師の記念像を立てしが、人皆之に満足せり。倫敦に居る時、厩の上の一室を畫室として用ひ、此室にて造りし作を初て世に發表せり。そは惡魔の巨大なる頭の模造なりき。チャントレー晩年の頃、一友彼の畫室を訪うて室の隅にある此作を見て感じたりしが、チャントレー語りて曰く『此作は余が倫敦に來りて後、造りたる第一の作品なり。余は屋根裏部屋にて頭に白の帽子を戴きて之を造れり。資乏しくして只一挺の蠟燭を求め得しのみなりしかは、之を此帽子に附け、何方に向くも頭と共に動きて光線を與ふるやうなしたり』と。フラックスマン美術學院展覽會にて此作を賞讃し、グリニツチの海軍教育院にて要する四人の水師提督の半身像をチャントレーに囑托したり。此依頼に繼いて他の依頼生じ、畫の方は抛つに至りたり。初め八年間は其模造にて五磅を得たることなかりしが、其有名なる「ホール・トゥーク」の頭は、非常の成功を得、彼の言に據れば

一万二千磅の報酬を得たりと云ふ。

チャントレー今は成功しぬ、されども勤勉精勵甚だ力め、いみじくも自ら其幸運を得たり。彼は倫敦にジョージ三世の立像を建設する役に十六人の候補者中より選ばれたり。數年後、眠れる子供等の像を作りしが、これは今リッチフィールドの寺院にありて其纖美譬ふるにもなく、爾來彼の名聲、榮譽、繁盛は常に増しつゝありき。其の忍耐と勤勉と堅忍不拔とは、彼が大を成し得たる手段なりき。彼は生れながらにして天才なりき、而して彼の健全なる常識は、彼をして其貴き才能を善く用ひしめたり。彼は當代の人の常として慎重機敏なりき。其伊太利旅行に携へ行きし紙入には、藝術に關する種々の筆記、日々の費用や、大理石の時價の記録等を入れたり。彼の趣味は甚だ單純なりき。彼が藝術の園に大を成せしもの、實に此單純の賜なり。ハンズワースの教會にあるワットの像は、圓滿完全せる藝術品と思はる。されど、それは全く技巧を用ひずして單純なり。其同輩の美術家の缺乏を救ふこと著しかりしが、人に聞ゆるを嫌ひて秘密になせり。彼は其財産の大部を英國藝術獎

勵のため美術學院に遺したり。

ダギッド
キルキッド
とキルキッド
デム・エツア
不慮の共
作者の勞に

ダギッド・キルキッド亦正直堅忍にして勤勉せしこと、其生涯を通じて著し。蘇格蘭士の一牧師の子にして、幼にして夙に藝術の才あることを示せり。學生として怠慢不能なりしが、顔や形を畫くこと熱心なりき。沈黙寡言なる少年にして、既に早く精力を一方に集中するの風あり。此風は生涯を通じて其特質なりき。彼は常に注意して描くべき機會を求め、――我家の壁、河岸の砂等に好んで描きたりき。ジョット（譯者註、十三世紀伊太利フロレンスの畫工兼建築家の如く、如何なるものも彼に器具として役立ちたり。彼は燃えさしの棒を畫筆とし、平滑なる石を畫布に代へ、往來にて逢ふ襤褸の乞食も其畫題となれり。人の家を訪ふや、壁に畫を遺して訪問の印とし、中には家婦の之を厭ふものもありき。之を要するに、牧師なる父が描畫を以て、罪惡の職となして反對するにも拘はらず、キルキッドが強き天性は枉ぐべくもあらず。丈夫の如く艱難の嶮路を攀ぢて其道を進み、終に美術家の一人となれり。初てエディンバラの蘇格蘭士美術學院に入學を志願せし時は、其描く所粗雑不

『倫敦なる學友リンネルとバーネットが藝術について談話を交ふる時は、余は常に二人に近よりて其言ふ所に耳を澄せり。こは二人は智識博く余は知識狭かりしに依る』と。キルキーは全く誠直を以て此言を發せしなり。蓋し彼は常に謙遜なりき。其村の政治家の報酬として、マンズフィールド卿より得たる三十磅を以て、彼は先づ家郷にある母と姉に帽子、肩掛、衣服等を贈りたり。彼の如き貧窮の身にして之を爲す誠に難しと謂ふべきなり。キルキー初め貧窮なりしたため自ら出来るだけ節儉する風を得たり。然れども彫金工アブラハム・レームバッチの自傳の諸處に見ゆる節儉に伴うて高潔なる慈善心を以てせり。

キリアム・エッティーも亦撓まず屈せず堅忍勤勉せし藝術家として著し、父はヨークの薑餅香料等を造る人、母は綱製造人の娘にして、著しき力及び獨創的の性格を有する婦人なりき。彼は小兒たる時既に繪畫を好むことを現はし、壁床等に畫を描けり。其初の墜筆は一フアーシング(譯者註、一片の四分の一なり)にて求めし白墨なりしが、次に石炭の片かた又は燒きし木片を用ひ

たり。母は藝術を解する人にあらずして、其子を印刷屋の徒弟に入れたり。されどもエッティー暇を以て畫を描き、奉公の期限終りし時は、其傾向に従ひて畫工となり、他の職業には決して就かずと決心せり。幸にも叔父と兄はエッティーの此新生涯に進むを助くるを得、喜びて美術學院の生徒なるべき學費を彼に給したり。レスリー(譯者註、チアーレス・ロバート・レスリーと云ふ十九世紀英の歴史畫工なり)の自叙傳に據るに、エッティーは學生仲間より才幹あるも、遲鈍遲足にして到底大家となり得べからずと、見做されたり。然りと雖も、彼は靈妙なる藝術的能力を有しぬ、而して藝術の最高路に於て精勵以て進歩を計り、遂に卓越の地に達しぬ。

藝術の士苦難に遭逢せしもの多し。苦難は彼等の勇氣と忍耐心とを試練して最大に進め以て成功せしむるなり。苦難のために失墜せし人幾許あるか。吾人は決して知ること能はず。マーチンの如きは世にも類少き行路難に逢へり。其第一の大作に従事し居る時の如き、將に餓死せんとせしこと一再に止まらず。傳へて曰く、彼或時の如きは囊中僅に一志ヒリシの銀貨を餘すのみ、此

銀貨は其光澤燦爛たるが故に貯へ置きしものなるが、遂に之を以て麵包を買ふの已むべからざるに至れり。彼は麵包屋の店に至り、一塊の麵包を求め、之を持ち去らんとするや、麵包屋は麵包を攫み取りて銀貨を叩きつけて返したり。光澤なき一志の貨幣は、此大事の場合に彼を失敗せしめたり、——それは賸物なりしなり、其宿所に歸りて、飢餓を醫さんため、麵包の残りし片^{かひ}を採さんとして、靴中をかきまはしたりと云ふ。熱心は是れ人に勝を與ふるの力、彼は此力を常に支柱となして、不撓の精力を奮ひて其目的を追求したり、彼は押し進む勇氣を有し、待つ所の勇氣をも有せり。數日の後、機會を得て其畫を公示するや、彼の名忽ち揚がりぬ。外部の境遇の如何に拘はらず、天才は之に勤勉を加へなば、誠に生涯を保護するものなり、名聲は其來ること晩しとするも、眞の價值ある者は終には必ず之を得べし。——是れエッテイーの生涯が證明する眞理にして、又實に凡て大藝術家の生涯が證明する眞理なりとす。

大に注意して訓練し、學校の方式に依りて教養するも、自ら盛に活動勉勵せずしては藝術家たる能はず。藝術家は獨學自修の人ならざるべからず。高

ビュージン

き教養ある人々は獨學自修の人なり。ビュージン、父の職に養成せられて、建築學に關する普通一般の法則知識は皆學びたれど、彼は其知る所の誠に些少なること、最初より始め直さるべからざること、勤勞の訓練を過さるべからざることを感じり。されば若きビュージンは、コズント・ガーデン座の普通大工に傭はれ、——最初は舞臺の下にて働き、次にフライス^{（譯者註、前舞臺の上の廣き場所の稱なり）}の後に働き、次に初て舞臺の上に働けり。かくして彼は勞作に馴れ、建築の趣味を養ひたり。蓋し大なる歌劇^{オペラ}の劇場にては、工作の用種々多様にして、建築の趣味を養ふに適するなり。劇場が時來りて終りし後は、倫敦と二三佛蘭西の港との間の帆船に働き、同時に利益ある實業を営みたり。機會ある毎に上達して古き建物を寫生し、殊に宗教上の建物を見る毎に好んで寫せり。後同一の目的を以て特に大陸に旅行し、繪畫を滿載して家に歸れり。かくして彼は得んとして進み、常に勤め、一步一步秀拔と卓越とを確得して、遂に全く秀拔卓越の地に達せり。

スコット

エディンバラなるスコット記念碑の建設者デヨージ・ケンブも亦勤勉を以

て同一の路を徐行せし人なり。彼はペントランド丘陵地の南側にて其職を營める貧しき牧人の子なり。閑靜なる田舎に在りては、彼は藝術の作物について思ひ樂む機會なかりき。父は一農家に傭はれて牧羊し居たる者なるが、此農家のためケンプは十歳の時ロスリンまで使に行き、壯麗なる城廓や禮拜堂を見ていたく之に感じ、其印象生々として心に留まれり。彼は父に指物師たらんことを乞ひたり、是れ恐らくは建築技術に對する嗜好を満足せしめん爲なりしならん。かくて彼は近隣の村大工の徒弟とせられたり。奉公の年期終りて後仕事を見出さんため、ガラシールスに行きたり。器具を背負ひてトキードの弊を辿りつゝある時、一馬車あり、エリバンク塔の附近にて彼に追及せり。車中の主人の差圖に依りて馭者はケンプに何處まで往くかと問へり。ケンプ答ふるにガラシールスに往く由を以てす。馭者乃ち彼を招きて其傍に坐せしめ、ガラシールスに伴はんとす。此深切なる車中の主人こそ實にサー・ラータースコット(譯者註、十九世紀英國の文豪にして、時にスコットはセルカーク州の長として公用のため旅行し居りしなり。

ガラシールスに働き居る時、ケンプはメルロース、ドライバ、ジェドバー等の各寺院を訪うて仔細に之を視察考究せり。其建築を好む念に驅られて、彼は北部英俱蘭土の大部分を大工として稼ぎ廻り、途中壯麗なるゴシック式の建物を見る毎に、必ず之を視察し、之を描き貯へたり。ランカ州に働き居る時、或日五十哩を歩いてヨークに到り、ミンスター寺院を細心調査して一週間を費し、後復た徒歩にて歸りたり。次に彼はグラスゴーに到りて、此處に四ヶ年を費し、僅少なる餘暇を用ゐて其壯麗なる寺院を調査せり。彼再び英俱蘭土に歸り此度は更に南部に進みてカンターバリー、キンチェスター、ティンテルン等の有名なる建物を視察攻究せり。千八百廿四年、同一の目的を以て其職に依りて生計を營みつゝ歐洲を旅行せんと企てたり。ポローネに達し、アツペゼレ、ボーエースを過りて巴里に着したり。右三處に於ては、數週間滞在して描畫と學習とをなせり。彼熟練なる建築家にして、特に工場建築に就いて知る所多かりしかば、到る處直ちに人に傭はれしが、其仕事を爲すや、常に古き壯麗なるゴシック式建物の附近に於てし、餘暇を以て其建物を

視察せり。

一年間海外に勞作し、旅行し、研究せる後、彼は蘇格蘭土に歸りぬ。彼は其研究を續けて描畫及び配景法に熟達し、メルローズ寺院の廢址は其大に好む所なりき。彼は此建物の畫五六を苦辛して作り、其一は此建物の廢頽せざる以前の有様を描きしものにて、後彫刻せられたり。彼はまた建築物の模造者として人の依頼を受け、エディンバラの一彫刻家の始むる著述のためにブリットン譯者註、十八九世紀英の考古學者の書、古代建築法に倣ひて畫を描きたり。是れ彼の趣味に合ふ仕事にして、熱心之に力めて迅速進捗しぬ。此目的のために蘇格蘭土の半を徒歩旅行し、藝術の大家も賞讃する繪畫を描ける間も、尙且つ普通の建築工として生活せり。然るに著述を企てし人突然死して、出版は罷められ、ケンブは他の仕事を探したり。ケンブは極めて寡言にして常に謙遜なりしかば、人の彼を知るもの少なし。時に偶々スコット記念像建設委員會は、懸賞を以てスコット記念像の建設を求めたり。競争者の數甚だ多く、建築の大家さへ其中に交りしが、全會一致を以て選びたるはケンブ

ジョン・ギブソン

の考案なりき。ケンブ時に數哩を隔てたるエアーズ州のキルキニング寺にて働き居たりしが、一書簡來りて其委員會の決定を知らせたり。憐れむべき哉。ケンブや、彼は此事の後、暫時にして世を去り、其不屈なる勤勉と自修との結果の石に體現せられたるを見ずして死せり。——此記念像や文豪のために造られたる記念として最も美麗最も恰好なるものの一なり。

ジョン・ギブソンも亦藝術に對して至醇なる熱心と嗜好とを有する藝術家なり。彼此熱心と嗜好とあるに依りて賤しき誘惑に打勝ちて金錢のために働くことなきを得たり。彼は北威爾士^{エー、ルズ}コンエーに近きギフィンに生る、園丁の子なり。彼懷中小刀にて木に彫刻するを好み、以て天性藝術の事に適するを示せり。父は我子の才能の向ふ所を知らざりしかば、リヴァプールに送りて指物師兼彫木工の徒弟とせり。彼は速に其職に上達し、其彫刻の中大に賞讃せられたるものもあり。かくして彼は自然に彫刻をなすに至り、十八歳の時、タイムの小像を蠟にて造りしが、こは非常に世の注意を牽けり。リヴァプールの彫刻家フランチー氏等、ギブソンの年期證文を買ひて之を六年間

の約束にて徒弟となしぬ。其間彼の天才は其多數の創作物に歷々として現はれたり。是より彼は倫敦に進み、又次に羅馬に赴き、名聲歐洲大陸に喧傳せらるゝに至れり。

ロバート・ソーパー

美術學院會員ロバート・ソーパーも亦ギブソンの如く貧家に生る。父はドゥムフリースの靴製造工にして、ロバートの外に二人の子を持ちしが、一人は熟練なる彫木工なり。或る日一婦人、父の店に來り、時に尙小兒なるロバートが腰掛を机に代へて頻に畫を描き居るを見たり。婦人は其畫を觀て小兒の畫才を認め、彼のために描畫の仕事を見つけやり、又他の人々に託して彼が繪畫の研究を助けしめたり。彼は勤勉、精勵、健實、沈黙にして、仲間と交はること少く、親交の者僅少なりき。千八百三十年の頃、此町の紳士等彼に費用を與へてエディンバラに赴かしめ、彼は此處にて蘇國美術學院に入學を許可せらる。此校にて彼は大家の下に學ぶを得、其進歩迅速なりき。後エディンバラを去りて倫敦に移り、バックルユーチ侯爵の庇護の下に遂に名を成すに至りたり。侯爵の庇保が彼を眼識ある人々に紹介するに助け大なりしと

するも、生れながらの天才と勤勉専心となかりせば、如何に庇護せらるゝとも、大藝術家となること能はざるなり。彼は實に大藝術家なりき。是れ吾人の言を俟たざる所なり。

ノーエル・パトソン

ノーエル・パトソンは有名なる畫工なるが、初はダンファームライン及びペリスレーにてテーブル掛やモスリンに刺繡の型を引きたり。是れ彼が藝術家の生涯の序幕なり。同時に更に高尚なることに従事し、人物畫などをも描けり。彼はタアナーと等しく何事をも爲す人にして、千八百四十年未だ二介の青年に過ぎざりしが、レンフルー州年録に畫を描けり。彼は着々として其道を進み、其歩行や徐々たれども正確なりき。されど彼は久しく無名なりしが、議會が懸賞にて集めし模様形の陳列せらるゝや、宗教の精神と題する彼の畫、彼は之がため第一等賞を得たり。は一世の注意を惹き、彼は直に眞正なる藝術家として世に知られたり。其後作る所の畫、オペロンとチタニアの和解、家郷、ゼブルイデー、トリスト等の如きは、彼が藝術の力量、修養共に確實に進歩せることを示せり。

ブラックバーンの鍛冶屋、ジェームス・シャープルスも、清貧に安んじて堅忍勤勉藝術を學習せし人なり。彼は一千八百二十五年ヨーク州エークフィールドに生る兄弟十三人あり。父は鑄鐵工にしてバーリーに移轉して其職を營めり。父は男の兒等には少しの教育をも與へず、程よき年齢に達するや、外へ出して勞作に従事せしむ。ジェームスも亦十歳の頃鑄造所に送られ、爾來此處にて二年、鍛冶場の小僧を勤めたり。次に彼は父の機關職工を勤め居る機關工場に送らる。彼の仕事は、此處造工のため釘を熱して運ぶこととなり。其勞働時間甚だ長く、屢々朝の六時より夜の八時に及びしが、父は勞働時間の後、子に僅少の教育を與ふるやう計り、ジェームスは斯の如くにして稍々文字を學びたるなり。汽鑪製造の間に働こ居る時、一出來事起りて之に依りて彼は初めて繪畫を學ばんとの志を起せり。

職工長は工場の床上に汽鑪の四角を描くとき、其畫線を看守るに屢々彼を用ひたり。かゝる時は職工長は自ら線を石で引、彼を指揮して必要なる寸法を計らしめたり。ジェームス忽ち之に就達して職工長に大なる助をなせ

り。其暇ある時は我家の床に汽鑪の考案を描くを非常の樂とせり。或時親類の一婦人マンチエスターより來り訪ふこととなり、客人を容るゝため家は出來るだけ掃除整齊せられたり。時にジェームスタ方鑄造所より歸り來りて例の如く床に描けり。彼が白墨にて汽鑪の考案を描きて其圖やゝ進みたる時、母は客人を伴うて入り來り、ジェームスが未だ顔を洗はずして眞黒のまゝ床一面に白墨を塗りたるを見て大に怪けり。然れども、親類の婦人はジェームスの勤勉を喜ぶ旨を述べ、其圖案を賞め紙や鉛筆を、小さきスキップ（婦人はジェームスをかく呼び居たり）に求めやらんことを勧めたり。

兄に勵まされて、ジェームスは人物風景畫を描きて石版に印刷し始めたり。されども此時未だ遠景畫の法則を知らず、及ひ影の原則を知らざりき。然れども彼は勞作を續け、次第に模範に就達するに至れり。十六歳にしてバーレー器械學校に入る是れ理髮業を営める一素人畫工の致ふる繪畫の級に入らんがためなり。此處に彼は三ヶ月の間一週一回の課業をなせり。師は彼に薦むるに圖書室よりバーネット（譯者註 フランセス・ホノチソン・バー

ネットならん、十九世紀米國の著述家なりの著『繪畫に關する實地論』を借覽せんことを以てす。されどジェームスは力未だ足らずして讀むに困難なりしかば、母又時としては兄に書中の諸節の朗讀を乞ひ、傍に坐して之を聴けり。彼は讀書の術を知らざるを不便に思ひ、書中の記事を熟知せんとの熱望に驅られて、學校の繪畫の組を第一期のみにて退き、家にて讀み書きの學習に其身を委ねたり。彼は忽ち讀み書きに通ぜしかば、復た學校に入りて再びバーネットの書を繙きたるに、容易に之を讀むことを得て後日のために書中より拔萃鈔録したり。ジェームス此書を學ぶこと甚だ熱心にして、毎朝四時に起きて之を讀み、諸處を鈔録し、六時に鑄造所に出勤して夜の六時又時としては八時まで働き、家に歸りて新しき熱心を以てバーネットの研究を始め、屢々夜更くるまで之に努めたり。夜は又描畫及び他の畫の模寫に用ふることあり。其中レオナルド・ダ・ヴィンチ(譯者註、前出の美術家、基督最後の晚餐)の模寫には終夜を費したり。誠に彼は臥床には入りたり、されども心これが爲めに奪はれて眠る能はず、再び起きて其畫筆を動かしたるなり。

次にジェームスは油繪を試みんとし、布屏より畫布を購ひて框の上に其れを延はし、白き鉛を之に塗り、畫家より求めし繪具を以て此上に描き始めたり。然れども彼の企畫は全く失敗に終りぬ、即ち畫布粗にして節多く、繪具乾かず、是に於て他に方法もなく、其舊師、理髮師に問ひしに、油繪に用ふる畫布は賣品のあること、油繪を描くにのみ用ひらるゝ繪具や假漆(ワニス)のある事を知れり、されは金子調ふや否や、入用なる物品を買ひ求めて新に始めたり。舊師なる素人畫工より描き方を教はりしか、彼は大に之に成功して師の模寫よりも優れたり。第一の畫は、羊の毛刈りと題する彫刻の模寫にして、後彼は之を半クラウンにて賣れり。一志にて求めし、油繪手引を助として餘暇を以て勞作甚だ力め、其材料について尙よく知る所ありたり。彼は自ら畫架、繪具、板、繪具板、小刀、ペンキ箱を造り、時間を多く働きて金を得、以てペンキ、刷毛、畫布等を求めたり。是れ誠に彼の兩親が其子の目的のため許せし少許の資本なり。兩親は數多き家族を支へる負擔あるを以て、これ以上になすこと能はざりしなり。彼は屢々マンチェスターに歩み行きてペンキと畫布(キャンバス)二三志を

求めて夜家に歸る、往復十八哩にして殆ど夜中に家に歸着す、時々は雨露に濡れて全く疲れ果つれど、不撓なる希望と不拔なる決意とを以て我と我身を勵まして歩めり、此獨學自修の美術家が、其後の進歩は彼より著者〔譯者註〕スマイルス氏自らを云ふに來りたる手紙の中に最も善く言ひ表はさる、

彼は曰ふ『余は次に月夜の景果實、其他一二を描きしが、次には、鍛鐵場を描かんと欲したり、余はそれについて暫く考ふる所ありたれど、未だ之を畫にせんとは企てざりき、されども、今余は既に紙上に其畫稿を作り、次に之を畫布に描けり、畫は余の働き馴れたる工場の如きものゝ内部を示すのみ、特別に一工場を指すにはあらず、されは此點より言へばそは創思なりと謂ふへし、畫の骨組を描きし後、之を首尾よく書き上げ、ためには、形の筋肉を正確に描き得んため、解剖學の知識の必要なるを悟れり、兄ビーター、此時余を助けんために來り、親切にも余にフラックスマンの『解剖學の研究』を購ひくれたり、——此書價二十四志^{シリング}なりしかば、當時の余には購ふこと能はざりしなり、余は此書を以て大なる寶となし、精勵之を學びぬ、朝は三時に起床して之に

従ひて描き、時々は兄のビーターに夜未だ明けざるに、余の爲めに標本^{モデル}として立たんことを求めたり、是に依りて次第に上達せしと雖も、自己の畫を以て世に立ち得べしと充分信ずるに至るまでには尙時日を要したりき、余は又遠景法の知識なきため不便なるを感じ、ブルックテラー〔譯者註、十七八世紀英の數學家の『原理』と題する書を細心研究して、此不便を除かんとせり、暫時にして余はまた描畫を始めたり、家にて遠景法の研究に従事せる間は、工場にては工事の重きものを願ひて爲せり、其程輕き鐵を熱するより重き鐵を熱する方時間を要する故之を待つ時間長く、爲めに一日の中に屢々僅少の餘暇を得、此時間に余は自分の働ける竈の前にて、細心留意鐵板に遠景法の圖形を描きたるなり』と

斯の如き熱心に勞作學習して、ジェームス・ンヤールプスは藝術の原理に深く通ずるに至り、其技術ますます上達するに至れり、其奉公の年期終りし後十八ヶ月程を経て、シャールプスは父の肖像を描きしが、此畫は市民の大に注意する所となり、後幾許もなくして出來上りし、鍛鐵場の畫も亦然りき、

彼描畫に成功せしかば、工場の鐵工長、其家族の團欒を描かんことを依頼し、シャールプス求に應じて甚だ巧に描き、職工長は約束の十八磅の外に尙三十志を與へたり。此畫に従事せる間に鑄造所に働くを罷めしが彼は全く其職を棄て、専ら繪畫にのみ從はんと思ひたり。彼は數種の畫を描き始めしが、其中に基督の頭あり、大さも形もバーレーのに等し。然れども描畫の依頼未だ多からずして時間に餘りあり、又收入充分ならずと思はれしかば、再び革の前掛をかけ、正直に鍛冶の業を營み、餘暇ある毎に其鍛鐵場の畫を彫刻になすことに從へり。此彫刻は後之を公にせり。彼は次の如き事情より彫刻をなさんと志を起せしなり。彼マンチェスターの一繪畫商に畫を示せしに、商人は熟練せる彫刻家の手にて之を版にし印刷せば、誠に良好なるものとならんとの見解を呈出せり。シャールプス彫刻の術を知らざりしも自ら之を彫刻せんと心の心を忽ち起せり。此計畫を行ひゆく途中に、困難に遭遇して首尾よく之に打ち克ちしこと、彼は下の如く記せり。

『余はシェッフィールドの鋼鐵板製造人の廣告を見たり、其廣告には種々

の大きさの鐵板の價を表にて示しありたり。余は恰好なる大きさの一を定めて價を送り、同時に小額の金を添へて二三彫刻の道具を送らんことを求めたり。余はどれ／＼の道具を要すと言ひやらざりき。當時余は彫刻については毫も知る所あらざりし故なり。さはれ、程經て鐵板と共に三四の彫刻刀と一本の蝕鑢針到着せり。此蝕鑢針は要用法を覚えざる中に毀したり。此鐵板に彫刻し居る中、技術家の合同協會は賞を懸けて模様畫を募りしが、余之に應じて幸にも賞を得たり。後少時にして余はブラックバーンに移り、エーツ氏等技術師の許に機關職工として傭はれ、餘暇には繪畫彫刻をなすこと以前と異なるなし。彫刻術には遅々として殆ど進歩することなかりき。是れ適當なる器具を有せざる爲めに困難を感じしに由れり。依て其目的に適ふべき若干の器具を造らんと決し、數回の失敗を経し、遂に多數の器具を造り得しが、余は彫刻には常に之を用ひたり。尙又余の適當なる廓大鏡を有せざりし爲めいたく當惑し、已むなく父の眼鏡の助を借りて鐵板の一部を彫りしが、後漸く恰好なる廓大鏡を得たり。こは余に頗る役立ちたりき。鐵板を彫刻

し居る間に一事件の起るあり、爲めに余は殆ど彫刻を罷めざるを得ざりき。余は屢々緊急なる用事のため、長き間彫刻を罷むることあり、此間は鐵板の鑄びざらんがため、油を既彫の部分に塗れり、或時鐵板を見るに、塗りし油の凝結して黒色となり、之を掘り出すこと極めて困難なるを知れり、余は針を以て之を掘り出さんと試みたり。されどこれには殆ど新に彫ると同じ程の時間を要するを知れり、余は爲めに大に失望しぬ、されども遂に一策を案じ、曹達を含める水中に鐵板を入れて水を沸騰せしめ、齒楊子にて既彫の部分を磨したり。然るに余の策は全く成功し、油は其跡を收めたり。最大なる困難は今や終りぬ、我勤勞をして遂に成功に至らしめしもの、實に唯耐久と堅忍との力のみ。余は鐵板の彫刻を完成するに他より幫助忠言を受けたることなし。故に若し此作にして何等かの價值ありとせば、其は實に余自身のものなりと謂ひ得へし。而して之が製作に於て堅忍勤勉決意の、如何に力あるかを示せしとせば、余は實に之が名譽を擔はんと欲するものなり」と。

一の彫刻物として、鍛鐵場を批評せんことは余の目的にあらず、此作の價

値は既に藝術に關する諸雜誌に依りて充分に認められたり。シャール・ブルスは、之が製作のため、毎夜暇を用ひ、五年間かゝりたり、而して彼は其出來上りし鐵板彫刻を印刷所に持ち行ふ。時、初めて他にも鐵板彫刻をなしたる人あるを知れり、以上彼の勤勉と天才とに就いて彼が自ら記する所を擧げしが、此不朽なる文字の外に余は尙彼の記述する所一を示さん、是れ家庭に於けるものなり。『余結婚して既に七年を経過す、此間余鑄造所にて晝間の業を終へて後、畫筆又は彫刻刀を執りて屢々夜遅くに及ぶ。此時々は傍にありて面白き書を余に讀み聽かせたり、是れ實に余の最大快樂なりき』。語單なりと雖も、此趣向あり價值ある工人が、完全なる常識と至純なる正直とを有せしことをいみじくも證明するものなりと謂ふべし。

音楽家の勤勉

勤勉専心は繪畫彫刻に上達するに缺くべからざること上述に依りて明かなり。而してこは音楽に於ても亦必要なるものなり。——美術と音楽、是れ同類の藝術なり、一は形狀と色彩との詩、一は天然の音聲の詩なり。ハンデルは不屈不斷の勞作者なり、彼は決して失敗のために屈することなく、困難に會

ハンデル
ハイドゥル
トン、ペー
ン

する毎に精力益々増進したり。負債ありて返すこと能はず、窮乏慘澹を極めしが、一時も失望したることなく、一年にして「サウル」「イスラエル」「ドライデンの詩の樂譜」「十二のグランド・コンサートス」「アルプスなるジュピター」の歌劇等を出せり。是れ皆彼が傑作の中なり。彼を傳せし者の曰ひし如く「彼は萬事に堪へぬ、人の力を借らず、専ら自力に依りて十二人前の仕事をなせり」。

ハイドゥン譯者註、十八世紀獨の作曲家、其技術に關して曰へり「余の技術は一問題を取りて之を逐ふことなり」と。モザートは曰ひぬ「勞作は余の重なる快樂なり」と。ベートーエン譯者註、十八世紀獨逸の作曲家の愛する格言に曰く「向上の念に富める才幹勤勉の士に、こゝは既に遠き處、是以上進むを要せず」と云ひ得る限界は此世にあらざるなり」と。モーンエレス譯者註、十九世紀獨逸の畫工にして作曲家、其「フィデリオ」の曲譜を洋琴に彈ずるためベートーエンに送りしが、ベートーエン其曲の最後の頁の下にかく記しあるを見たり「神の助に依りて完成す」。ベートーエン乃ち直に其下に「オ、人よ、汝自身を助けよ」と記せり。是れベートーエンか藝術的生涯の標語なりき。ヨ

ハツハ、
アイエル、
ペール

ハン・セバスチアン・バッハ譯者註、十八世紀獨の作曲家にして伶人自身について語れり「余は勤勉なりき、余と等しき勤勉をなす人は、誰人にて余と等しき成功を得べし」。然れどもバッハは確かに生來音樂をいたく好む人、此嗜好ありし故に自ら勤勉したるにて、此嗜好こそ彼が成功の眞秘訣なりしなれ。尙少年なりし時、彼の兄はバッハの才能を他の方面に向けしめんため、其研學せし所を記せしものを破りたり。そはバッハが蠟燭の使用を禁ぜられて月光にて寫せしもの、彼が生來音樂の大天才なることを示すものなり。ペールは千八百二十年、ミランより書を人に送りてマイエルベル譯者註、十九世紀獨の作曲家について記して曰く「彼は多少の才能を有すれども、天才の士にはあらず、一日十五時間音樂に勉めて孤獨に生活す」と。多年は過ぎぬ、マイエルベル勞苦勤勉に依りて今は寔に天才となりぬ。其作「ロベルト」、
「アゲノーツ」、
「フロフェーテ」等は、明かに晩近出づる所の歌劇の最傑作中に加へらるべきものにて、能く彼の天才を顯はせり。

博士アイ
ン

英國人は概ね實地の方面に精力を用ひしを以て、作譜の術に於ては未だ

大に著はれざりき。然れども作譜のことに於て、堅忍勤勉せし人々なきにあらず。アーン(譯者註、トーマス・オーガスチン・アーンなり、十八世紀英の作曲家にして伶人は、家具商の子にして、父はアーンを法律家となさんとせり。されど彼天性音楽を愛好すること甚だ深く、到底音楽研究を止むること能はざりき。一辯護士の事務所に書生たりし時、窮乏なりしも、其音楽の趣味を満足せしめんため侯の制服を借着して、侯のみに限られたる歌劇^{オペラ}に行くを常とせり。父には隠して彼は胡弓^{バイオリン}を學び、大に之に上達したり。父一日偶然にも一隣人の家を訪ふるに、其子アーンが音楽家の一團に代りて胡弓^{バイオリン}を弾き居るを見、大に驚愕せり。此出來事に依りて彼の運命は定まりぬ。父は最早子の志望に反對せず。世は爲めに一法律家を失ひしも、豊富なる趣味と優美なる感情とを有し、英國の音楽界に多くの價値ある作物を遺したる一音楽家を得たり。

獨學自習
の作曲家
キリアム
ジャック
ソン

「イスラエルの救世」の作者故キリアム・ジャックソンの生涯は、音楽の攻究に於て堅忍を以て艱難を破りしことの趣味多き實證なり。「イスラエルの救

世」は神樂にして、ヨーク州なるジャックソンの故郡の町となる町々に興行して大喝采を博したるもの。彼の父はヨーク州の西北隅ヨアの豁谷にある一小市マーンヤムの水車屋なり。父はマーンシヤム義勇兵の音楽隊にて横笛を吹き、又教會區の合奏の歌者たり。蓋し音楽の趣味は此家の相傳なりしならん。ジャックソンの祖父も、亦マーンヤム教會の主歌者鳴鐘者たりき。ジャックソン少年の時、毎日曜の朝鳴鐘に出でたり。是れ彼が音楽にたづさはりし最初なり。之をなせる間彼は彈手がバーレル・エルガン(譯者註、樂器の一種)を奏するに依りて益々驚異の心を起せり。オルガンの戸は、其音の教會内に自由に人らんだめ開きありて、之に依りてストッフ、パイプ、バーレル、ステール、キーボード、ジャック(譯者註、皆樂器中の裝置なり。皆充分に露はれ、他の人には見えざれど、棧敷にある役には能く見えて驚異の念禁じ難かりき。キリアム八歳にして父の古き横笛を奏し始めしが、此笛はどの音を出さざりき。されば母はキリアムに鍵^{キー}の一ある笛を贈ひやり。又後少時にして近隣の一紳士四の銀鍵^{シルヴァー・キー}ある笛を彼に與へたり。キリアム學校の課業よりも打

毬球遊、拳闘術等を好みて學事進歩せず、——村の校長は見込なしとして彼を顧みず、——兩親は彼をペートレーブリッヂの學校に送りたり。此處にて彼はブリッグハウス・ゲートの村合奏歌者の俱樂部に入りて樂しき社交をなし、古代英國の式にて音節を學びたり。かくて彼は音樂のリーディング(譯者註、音樂を見て直に奏すること)を能く練習し、速に熟達したり。彼の進歩は俱樂部の人々を驚かし、彼は功名の念に充ちて故山に歸りぬ。今は彼父の古き洋琴ピアノを奏することを學びしが、其音調甚だ面白からず、依て更に上等の樂器を得んと熱望せしが、之を求むるの資なし。恰も此時、近隣の教會區の書記少額の金を以て小なるバーレル・オルガン(譯者註、樂器の名)の狂ひたるを求めたり。此樂器は觀物モノに屬して北部の各郡を巡りたるものなり。書記は此樂器の音調を回復せんと試みしも能はず、終に若きジャックソンの技能を試みんと思ひたり。ジャックソンは是より先、教會の子風琴に改正改良を如へて成功したるなり。書記は之を驢馬の車に載せてジャックソンの家に持ち行きしが、少時にして樂器は修繕せられて再び昔の音を發し、書記の喜悅は一方な

らざりしと云ふ。

かくてジャックソンはバーレル・オルガンを造り得べしとの考を抱き、之をなさんと決心しぬ。ジャックソン父と共に之が製作にかゝりしが、二人とも細工の術を知らず、只刻苦精勵し、幾多失敗を経て遂に製作を終へぬ。其造りし樂器は甚だ正確に十個の音節を發し、近隣の人を以て驚くべきものとなしぬ。若きジャックソンは今は屢、招かれて教會の古きオルガンを修繕し、バーレルの上に新しき音節を附したり。是等のこと皆依頼者の満足を得たりしが、後彼は古きハープシコード(譯者註、樂器の名)の鍵を應用して、四音栓節のフッキング・オルガン(譯者註、樂器の名)を造りたり。彼は之を奏することを學びたり。——夕には、コールカット(譯者註、十八九世紀英國の作曲家)の「サロー・バース」を學び、晝は水車屋の業を營み、時々は驢馬に車を牽かせて、行商人として諸處を廻れり。夏の間は蕪菁かぶちの時節、枯草の時節、收穫の時節に野に出て、働けり。されど夕の暇の時間には音樂を奏して自らを慰めざることなかりき。次に彼は作譜を試み、其聖歌十二を、年齢十四歳なる水車屋の子の

作物」としてヨーク州の人故ケーミッヂ氏に示したり。ケーミッヂ大に之を喜び、不穩當と思はるゝ部分に印し、之を返す時、獎勵の意を述べて曰く「此作は御身に大信用を與へたり、御身は作することを續くべきなり」と。

一田舎音樂隊マーシャムに滞留せしが、若きジャックソン之に入り、後遂に之が首長となる。彼は順番に總ての樂器を奏し、音樂に關して著しき實際的知識を得たり。彼は又此樂隊のため多數の曲譜を作りたり。新しき一フインガー・オルガン(譯者註、樂器の一種)教會に備へつけられ、彼は其彈手に任せられたり。ジャックソン今は備水車屋を罷めて脂蠟燭工となり、餘暇には依然として音樂の攻究をなせり。千八百三十九年第一の聖歌を公にす、——題して「豐饒なる谿地をして喜悅して歌はしめよ」と云ふ。翌年は其、リーの姉妹を出してハッダースフィールド・グリー倶樂部より第一等賞を得たり。其作る所の聖歌、神よ我等に情あれ及び第百〇三番の讚美歌は二重の歌曲及び奏樂所のために書きたるもの、世に有名なり。是等の小作物の間にジャックソンは其神樂「バビロン」よりイスラエルの救世を作したり。之を爲すや、思想の

心に存ぶ毎に筆記し、蠟燭屋にて其業を終りし後、夜之を綴りたり。彼の神樂は千八百四十四年より四十五年に至る間に分ちて出版し、最後の歌曲は自分の第二十九回の誕生日に出したり。此作は世の歡迎を受けしこと一方ならず、北部の町々にては屢々之を演奏して大喝采を博したり。遂にジャックソン氏は音樂の講師として、ブラッドフォードに住み、此處にて彼はブラッドフォード町及び其附近の音樂的趣向を高むるに少からず力ありたり。數年の後彼はブラッドフォード合奏歌者の一團を率ゐてバッキンガム王宮に至り、女王陛下の前に出てたり、誠に名譽なりと謂ふべし。此時にも又水晶宮に於て彼が自作の一部演奏せられて大喝采を受けたりき。

此改訂版の印刷中、ジャックソン氏五十歳にて死したる由の廣告、其地の新聞に見えたり。彼が最後の作は、其死するむく前に出版上がりしもの、歌譜にして「音樂の眞實」と題したり。彼が早年時代について上來記す所は、數年前著者、譯者註、スマイルス氏自らを云ふがジャックソン氏より直接に得たるものなり、其時は彼尙アーシトにて脂蠟燭工をなし居たり。

斯の如きは實に獨學自修の音樂家の生涯の大様なり、自助勇氣勤勉は早

年の尋常ならぬ困難障礙を打ち破るに力大なるもの、此音樂家の生涯も亦實に此力を實證するものなり。